燈籠雜載
燭臺
手燭

レシカバ、約束ノ如ク周防守ヨリ大キナル燈籠ヲ寄附有テ、常燈ヲ建ラレケル、以前播磨灘ヲ乘ケル船、夜中風替リ抔シテ、明石前ハ破船セシ事ナド有シ、向後ハ彼燈籠ヲ目當ニシテ入ケル故、破船ノ愁ヒナシ、周防守ノ心ハ、畢竟此目當ニ至ルベキ爲ナリ、サレドモ城主ヨリ此所ニ移サセ、後ニ燈籠ヲ寄進セラレ、初ヨリ自分ノ功ヲ顯サズ、後ニ人ノ心付樣ニ諸事ヲ致サレケル、誠ニ思慮ノ厚キ人也ケリ、

〔毛吹草三〕山城　燈籠細工

〔下學集下器財〕燭臺（ショクダイ）

〔和爾雅五器用〕燭臺（ショクダイ）　燭奴（ショクド）燭架爲人形者　手燭（テショク）手燭同　照

〔書言字考節用集七器財〕燭臺（ショクダイ）又云燭奴、天寶遺事、

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕燭臺（そくたい）燈臺燭奴　短檠

按、燭臺、燭架、制不一、或作人獸之形、其用唯揭蠟燭耳、

〔中山傳信錄六〕燈燭

燭燈木底四方格、上寬下窄、白紙糊之、而空其上、施木柄釘柱上、雖大風不至滅燭也、王宮內所用皆然、

〔倭訓栞中編十五底〕て　ゑよく　中山傳信錄に燼簽を譯せり、手燭の字は周禮の疏に見えたれど、少異なり、

〔庭訓往來〕蠟燭之臺、雖不被載注文所進也、

〔調度口傳〕一燭臺の事

らうそくを立るもの也、大小品々有、眞銅やカヲ等なるべし、三ツ足有を式とす、ゑよくせん掛有、略義なるべし、鐵は略義なり、